

追悼抄



今回は5月25日掲載予定です

国際教養大学長

中嶋 嶺雄 さん

(2月14日、肺炎で死去、76歳)

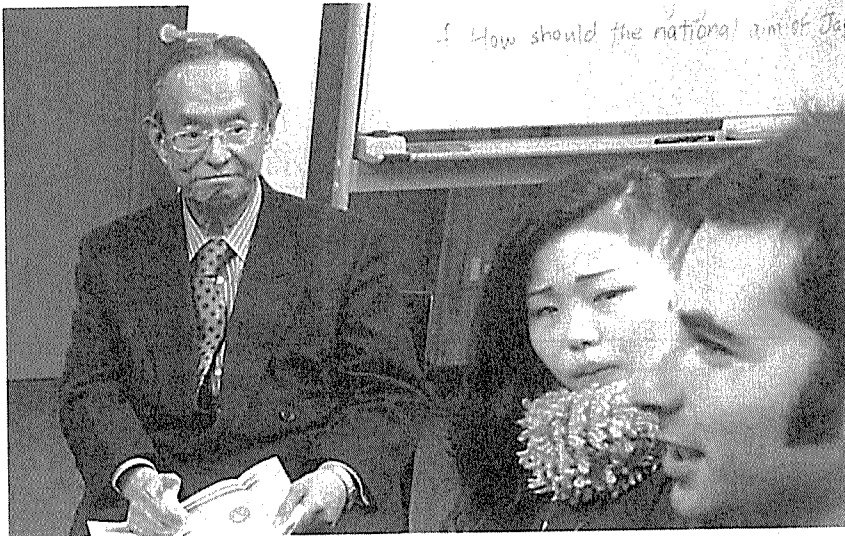
若者を世界へ 大学改革に力

最後に会ったのは昨年12月24日、羽田空港のロビー。中嶋さんが会長を務める才能教育研究会のクリスマスコンサートだった。4歳から13歳のバイオリニスト20人の演奏に拍手を送り「ステップを刻めば、人は必ず伸びるんですよ」と笑顔で持論を語ってくれた。

「人を育てる。その一点に信念と情熱を持ち続けた人でした」。そう振り返るのは、東京外国語大学時代の教え子である勝又美智雄・国際教養大学教授(65)だ。

同大学の学長として、次々に改革の矢を放った。ユニークな入試で多彩な人材を集め、全授業を英語で行う。1年間の留学を義務づける……。単に大学間競争の生き残りのためではない。信念は1980年、当時の文部省が発行した「教育委員会月報」への寄稿に表れている。

△もっとも恐ろしいのは、大国の誤算が引き金となって人類が破滅の危機に陥るこ



学生たちと「日本人のアイデンティティー」について語り合う中嶋さん(左)(1月10日、国際教養大)

と▽歴史の真実を透視し得る目をもたねばならない▽△そのような目は(略)教育によって培われねばならない▽冷戦が終わり、複雑化する世界で生きるための英知を育てる場を大学と定め、改革の必要性を強調していた。この原稿を依頼したのが、後に秋田県副知事として学長就任を求めた板東久美子文部科学省高等教育局長(59)だから、宿命の道筋だったと言える。

△とはいえ、自信満々で歩いてきたわけではない。妻の洋子さん(75)は「大事なことは必ず相談してきましたね」とほほ笑む。学長を引き受けるか迷い、一緒に現地へ。灰色の空の下の校舎を見て、洋子さんは「学生は来ないよ」と断るよう助言した。「でも、結局は自分で決めるんですよ」

就任すると自ら広報担当者

となり、大学紹介の資料を持って国内外を飛び回った。そんな多忙の中でも、学長室の扉は常に学生に開いていた。

4年の今井俊樹さん(22)は2011年冬、予約なしに学長室に飛び込んだ。何となく進学して勉強に身が入らないまま、マカオへの留学を目前に悩んでいたが、笑顔の中嶋さんの前で思いを率直に語るうちに、「中国の民主化問題を学びます」と決意表明していた。今は「世界に貢献する仕事を」と考えている。

その今井さんには心残りがあ。今年1月、「日本人のアイデンティティー」がテーマの討論会で、中嶋さんが口にした「アイデンティティーと民主主義を切り離して考えてはいけないよ」の言葉の意味が分からないのだという。

答えを探す今井さんの旅は続く。教育者の面目は死してなお、躍如としている。

(東京本社編集委員 松本美奈)